東方ハックオーバーII

体を突き刺すような厳しい寒さも終わりを告げ、雪解けと共に梅の花が幻想郷のあちらこちらで開花を始めていた。
皆が待ち望んでいる春の訪れは、すぐそこまで来ていた。
昨年も幻想郷は大波乱に巻き込まれ、一部の地域で四季がバラバラに訪れている等の異変が起きたり、人里ではいつの間にか財産を使い果たしてしまった人が続出したりと、あちこちで大騒ぎの一年であった。
そしてここ、幻想郷の中でも実態が謎の包まれている妖怪の山で『それ』は行われていた。
時刻は既に夜を迎え、地上は一部を除いてそのほとんどが闇に包まれていた。
しかし、妖怪の山はその例外の一つであった。
山の八合目辺りに聳え立っている守矢神社では、神社全体を囲むように赤い提灯が点々と吊られていた。
広い境内の様々な所に莫蓙が敷かれ、参道に沿う様に出店がいくつか立ち並んでいた。祭囃子の太鼓や笛の音色が鳴り響き、それはまるでちょっとした縁日が行われているような雰囲気であった。
その参加者の大半は天狗と河童といった山を根城にする妖怪達だったが、その一角で珍しい組み合わせの者達がいた。
「針妙丸さんもいいタイミングでしたねー。さぁさぁどうぞどうぞ」

プロローグ

始終ニコニコと笑いながら酒をなみなみと注いでいたのは高麗野(こまの)あうんであった。内側へカールしたボリューミーな緑髪に、頭頂部には立派な角が一本生えている狛犬である。人懐っこそうな見た目ではあるが、これでも神社や寺を守っている立派な守護神獣であった。

「いやー、お城から地上を眺めていたらさ、普段よりも山の方が明るいから何かなーって思ったら、こんなお祭りをやっているだなんてね」

あうんの隣でちょこんと座っている日本人形みたいなサイズの少女……少名針妙丸(すくなしんみょうまる)が嬉しそうに両手で持ったお猪口を口に運んだ。

彼女は一寸法師の末裔とも言われている小人族であり、以前、ある妖怪の口車に乗せられてしまい、ちょっとした異変を起こした張本人でもあった。

そんな針妙丸は輝針城(きしんじょう)という天地が引っくり返った不思議な空飛ぶ城に住んでいた。針妙丸は輝針城の天守閣から地上を覗いた時に、妖怪の山で何かやっていると気付いたのだ。

あうんと針妙丸が談笑をしていると、二人の背後から影がスーッとのびた。

「はーい、お料理お待たせー」

そこに現れたのは両手に皿を持った東風谷早苗(こちやさなえ)であった。皿の上には焼き魚やら山菜等が豪快に盛り付けられていた。

「うわー！　凄い量ですね！」

「これ、全部食べたら縦じゃなくて横に大きくなりそう……」
「皆さんが持ってけ持ってけって言うので……ここに来るまでにこんなになっちゃった」
早苗は苦笑いを浮かべながら、皿を二人の前に置いた。だが、とても三人で食べきれる量ではなかった。
「まぁ、頃合を見て他の所に持って行くので、適当に食べましょう」
早苗の杯にも酒が注がれると、三人は満面な笑みを浮かべながら乾杯をした。
「かんぱーい！　ところで、今日はなんでこんなに賑やかなの？　お花見のシーズンはもうちょっと先じゃない？」
何も知らない針妙丸に、早苗がこの祭りの趣旨を伝えた。
「去年の春から、里とここの神社を行き来する索道が出来たのはご存知ですか？」
「索道？　索道ってあの長～いからくり仕掛けの大きな箱の事？」
「そうですそうです！　あれ自体は結構前から完成していたんですが、それを運用するとなるとまたややこしくて……」
索道が完成したのはいいのだが、先住民である天狗達は人間達が勝手に侵入する事を拒んでいた。河童は割と協力的だったが、天狗達の反対意見の声が大きく、運用は非常に難航していた。
しかし、守矢神社の祭神の一柱である八坂神奈子（やさかかなこ）が地道な交渉を重ねて、ようやく索道

の運用を実現したのだ。
その裏では各勢力の思惑が動いているが、それが人間達にとって害になるものではないので、幻想郷の秩序を守る（？）あの博麗霊夢も特に首を突っ込む事はなかった。
今まで、ほとんど妖怪からの信仰を得ていた守矢神社も、索道が運行を始めてから人間の信仰も得る事が出来るようになった。
そして昨年の年末『夜通しの二年参りと初日の出ツアー』というイベントを行った結果、見事に大成功を収めたのだ。
その結果、守矢神社だけではなく、協力した天狗や河童達にも利益が生まれ、今日は山を挙げての祝賀会だったのである。
早苗も最初は神奈子の傍に居たのだが、周囲にいるのは大天狗やらそれなりの地位を築いている妖怪達であり、あまり親しい者が居なかった事を知っていた神奈子の計らいによって、早苗はすぐに席を抜けることが出来たのである。
「ははーん、貴方も結構苦労しているのねぇ……」
針妙丸がうんうんと腕を組んで頷いていた。
「それも去年までの話です。今は索道が完成したおかげで、催事がない日でもぽつぽつと人は来ますし、里への営業もかなり減ったので、かなり楽になりましたよ」
「こっちの神社が盛り上がってる代わりに、霊夢さんの神社は閑古鳥が鳴いてますけどね」

あうんが苦笑いを浮かべながらそう言うと、早苗はグイッと酒を口に運んで溜め息をついた。
「霊夢さんってば、珍しく里で営業活動したり、なんか色々やって向こうの神社もそれなりに賑わっていたのに、私に褒められて満足しちゃったのか知らないけど、あっという間にいつも通りに戻っちゃったからねぇ……あの人もほんとしょうがない人なんだから」
「私も一緒にお手伝いしたんですけど、順調に右肩上がりになってきたなーって思っていたら、そこで終了でしたからね。霊夢さんって昔から努力する事があまり好きな方じゃないみたいなので、一度面倒臭いと思ったら、すぐに辞めちゃうんですよねー」
「たしかに……一時期、私は霊夢の所で匿(かくま)って貰った事はあったけど、必要最低限の事は面倒だからしないって感じだったわ。そのクセにあのデタラメな強さは……なんか納得いかない」
早苗とあうんは頷いて同意した。
「異変が起きてスイッチが入ると、あれほど頼りになる……もしくは絶対に敵対したくない相手になるんですけどね」
三人はそんな他愛もない話を続けながら、酒を呑んで料理を口にしていた。
それから暫らくして、ほろ酔い気分になっていた早苗はぽつりとある事を呟いた。
「うーん、なんかそろそろ甘い物が欲しくなってきたかも……屋台になんか置いてあった

かなぁ……」

早苗がよろよろと立ち上がろうとすると、何かを思い出したかのように針妙丸が声を掛ける。

「ちょいと待って、そういえば私、城を出る時に団子を持ってきたんだよ」

「お団子ですか？　それはちょうどいいですね！」

「うん、今日は里をぶらぶらしてたんだけど、そこで団子屋に声を掛けられて買ったやつがあるんだ。夜になったら食べようと思ってたんだけど、忘れるといけないから持ってきたんだ」

針妙丸は小さな巾着袋から、笹で包まれた団子を取り出した。

包まれた笹を開くと、そこには何とも可愛らしいサイズの団子がいくつか乗っていた。針妙丸からしてみたら比較的大きな団子には違いないが、早苗達からしてみたら飴玉ぐらいのサイズであった。

早苗とあうんは針妙丸からその団子を貰うと、美味しそうにかぶり付く針妙丸とは違い、一口で全部平らげてしまう。

「……ん！　小さいけど凄く美味しい！」

「ですねー。口の中が蕩けてしまいそうです～」

「たしかに、今まで食べた事がないぐらい美味しいかも……？　あの団子屋、恐るべし

……」
三人はあっという間に団子を平らげてしまう。
至福の瞬間を味わっていた三人であったが、少しずつある変化が起こり始めていた。
「ん～、なんかいい感じに酔いが回ってきたかも～」
最初にそう言い出したのはあうんであった。頭をふらふらと揺らしながら顔を真っ赤にしている。
「もー、らめれすよぉーあうんしゃんってばー、この程度じゃまだまだ足りないれしょー」
同じく顔を真っ赤に染め上げた早苗があうんの杯に酒を注ごうとするが、瓶の中身は空っぽで逆さまにしても何も出て来なかった。
「おりょ？」
「わっはっは！　二人とも顔が真っ赤だど？　まだまだねー」
伸ばした両足をバタバタさせて早苗達を笑っている針妙丸だが、その顔も二人に負けないレベルで顔が真っ赤である。
「よし！　追加でお酒もらってきましゅねー」
早苗がよろよろと立ち上がると、あうんと針妙丸も同時に立ち上がる。
「私もご一緒しますよ～」
「私もー！」

三人は千鳥足のまま、屋台が並ぶ境内へと姿を消していった。

案の定、その後の早苗達を見た者は……誰も居なかった。